

同級生

赤谷慶子

義務教育の殆どを海外と日本を歩き來せしため、同級生の友人なるものを持たず。同窗會と名打ちしものは二つのみぞ會員として在籍してあり。ひとつはパリの學校の同窗會にて、これはあたかもフランス人のごとく佛語を流暢に驅使用する故日向大使夫人設立せられたる會合。今ひとつは白金にある女子校の初等科より高等科までの卒業生を集めし「みこころ會」なり。パリより初等科五年生にて帰國し、中學一年に渡米するまで在籍せし學校の同窗會の五十一回生のクラス會に所屬してあり。クラス會は大體普通の日の晝食にて行ふ事となりたれば、これまでわき目も降らず働きたりし我には參加不可なりき。已而古希を迎へ、仕事にも餘裕出でて、參加するを得るに至れり。先月末十二年ぶりに出席せり。自分も含め、五十人近き同級生たちも歳を重ね、「お婆さん」に成り果てて、子供の頃の面影なく、こは誰なりやと惑ふばかり。自分以外は二年に一度のクラス會に出席せるがゆゑに、それぞれの顔は相ひ知るが如し。自分が唯一認識可能なる人物は、元クリスティーズ日本代表、その後現皇后陛下の女官なりし友人と赤坂の老舗の和菓子會社の令嬢のみなりき。後は絶えて認識できず、疾く疾く參加すべかりしとぞ嘆かるる。晝食會始まる前に司會擔當する幹事の一人より挨拶あり、他界せられし先生方や同級生への祈りより始まりき。まづは主の祈り、さてはアヴェマリア唱へ、始まる。唱ふるほどに、カトリックの女子校にて、授業も晝食も全ては祈ることより始まりたりきと記憶蘇れり。先生方には頭を下げるお辭儀ならず、膝を若干折り、右足を左後ろに下ぐるが敬意を表する作法なりし事も腦裏をよぎる。これはパリの學校にても同じなりき。子供の頃の我、立居振舞ひかくも上品なりしか。久方ぶりのクラス會にて、かくも鮮明に過去の記憶もどるなりと、驚きと懐かしさ我を包む。

(平成三十年十二月十八日受附)